

7 佐伯理一郎とペンシルバニア大学留

学——大学便覧(二八八七〜八八)から得た若

干の知見

渡辺 昭彦

佐伯理一郎(二八六二〜一九五三)は、既に阿知波五郎、長門谷洋治、指宿照久の各氏等によつて多くの報告がなされている。演者は、ウイリアム・オスラー(二八四九〜一九一九)がペンシルバニア大学教授時代に、佐伯がオスラーに直接教えを受けた唯一の日本人医師であることに興味を覚え、『オスラーの教え子、佐伯理一郎の人と業績』と題する拙稿を、日本医事新報第三九四七号(上)、八号(下)に発表した。今回は、その時に用いた参考文献(資料)の一つであるペンシルバニア大学便覧(University of Pennsylvania Catalogue and Announcements 1887-88)から得られた若干の知見を補足し報告す

る。

まず、大学便覧の「入学」の章では、「正規の医学学校を卒業し、成績優秀なるものは無試験で第三学年に入學できる。」という一項がある。佐伯の熊本医学校での成績証明書には「在学中成績優秀にして品行方正」と書かれ、日付は明治十九年(一八八六)九月三十日となっている。卒業証書の日付は明治十五年七月一日なので、明らかに留學直前にペンシルバニア大学三年次入学のために、佐伯が熊本医学校に依頼して特別に発行してもらつたものであることがわかる。かくして佐伯は前述の入学条件を満たしたので三学年に入學できたものと思われる(二八八七年一月三日入学)。

第二に医学部教授団は、ウイリアム・ペッパ―学長を筆頭に、十二名の教授が名をつらね、オスラーは臨床医学(内科)を担当していた。病理学並びに剖検はジェームス・タイソンの担当であったが、オスラーは自分の患者が死亡すると、病因や死因をつきとめるために、学生を集めて、自分が剖検をしていたようである。その時の剖検材料は、後に名著となった内科書(The Princi-

ples and Practice of Medicine Designed for the Use of the Practitioners and Students of Medicine 1992) を完成させるのに大いに役立った。

次に学習課程では、第一学年(臨床化学諸検査、薬理、骨解剖、組織学、剖検の他一般内科学講義)、第二学年(討議主体の臨床教育の他医化学、病理組織と身体所見診断学の臨床実習、剖検)。また、二、三学年を通じて大学およびフィラデルフィア病院での一般内科、外科と特別外来に出席しなければならなかった。三年では診断学を含んだ臨床内科、外科並びに婦人科の特別ベッドサイドの指導があり、他に眼、耳、のどなどを色々の器具を用いて診ることができた。

第四に、三学年のベッドサイドは、直接個別に指導が受けられるようにAからDまでの四組のグループに分けられ、それぞれオスラー(内科)、アシユハースト(外科)、グツデル(婦人科)そして特別外来の指導を順次受けるように割り当てられていた。これは現在のインターンシップに当たるものと思われる。

第五に三年生用テキストについて。明治政府は一八六

九年ドイツ医学を導入することに決定したとはいうものの、一八七〇〜一八八〇年代は、英米系特にペンシルバニア大学系の医学書が数多く翻訳され、医術開業試験や学生などに利用されていた。例えば、ペンシルバニア大学医学部三年生では、ウツドの治療学、アグニユーの外科学、レイデイやグレーの解剖学、フリントの内科学等をテキストとして使用していたが、これらはすでに日本語に翻訳されており、佐伯も留学前にこれらの翻訳本や原書で学んだことが想像される。

一八八八年四月二日に始まった卒業試験に合格(平均点数七三・八)。五月一日の卒業式を待たずに、次の留学地ドイツに向いミュヘン大学婦人科で婦人科を専攻。

最後に、同級生一同の写真を供覧し、同級生ウイリアム・シャープレスについてもふれる。

(渡辺小児科医院)